

## ナフル巡行の今

シーア派イスラームを国教とするイランでは、年間を通じてさまざまなイスラーム関連の宗教行事が執り行われるが、中でもイスラーム太陰暦モハラム月の服喪儀礼は毎年とりわけ盛大に挙行される。シーア派第3代エマーム・ホセインとその一族郎党のキャルバラーの荒野での戦いにおける悲劇的な殉教を悼み、エマームの命日であるアーシューラーの日を頂点に一種独特の異様な熱情をもって行われる一連の儀礼は、国を挙げての行事である一方、地方地方で特色豊かな展開を見せている。

エマーム殉教の追悼儀礼の代表格のひとつが、ヤズドなどイラン中央部のキャヴィール塩漠周縁の各都市で見られるナフル巡行である。ナフルとは、エマーム・ホセインの棺を象徴するとされる木組みの物体（なんとも名状しがたい形であるため、写真を参照されたい）で、モハラム月になるとこれにみっちり装飾を施し、日本の伝統的な祭礼におけるお神輿のように複数人で担いで通りを練り回す。



CC BY-SA 4.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0>> R.shahi24 (2018 年)



CC BY 4.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>> Ali Golshan (Mehr 通信社のサイト, 2011 年)

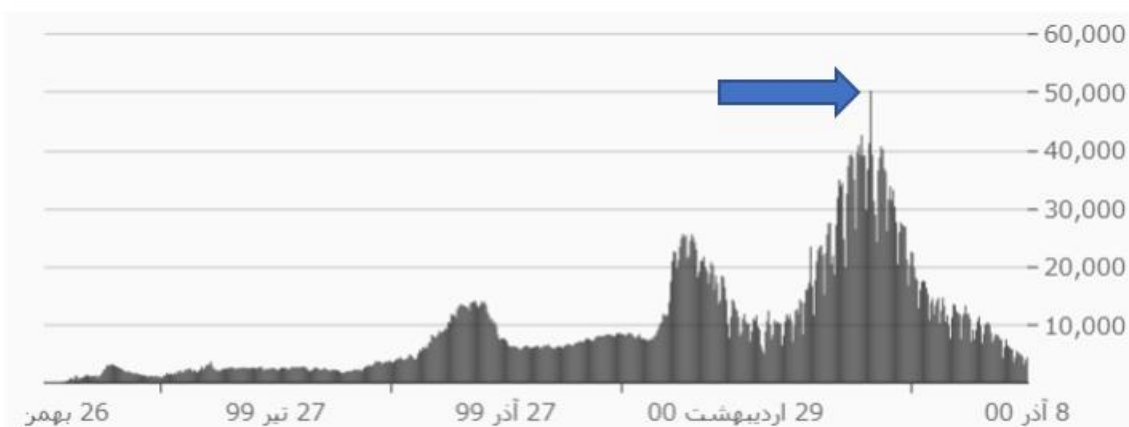
ここに掲げた写真の練り回し中のナフルはイラン中央部のヤズド州の街、タフトの有名な巨大ナフルであるが、大きなナフルの右側に小型のものも見えたとおり、ナフルは大きさも装飾も多種多様であり、同様に、練り回しの仕方や関連する風習・しきたり・小道具なども、多岐にわたっている。ナフルは一般的に、都市であれば街区、小村であれば地区ごとのヘイアトと呼ばれる集団が、自分たちのホセイニーエあるいはタキーエと呼ばれる宗教行事専用施設に保有している。モハッラムの服喪月になると、ナフルは長老格の者らの指揮のもと、代々伝わる作法に則り数々の装飾品を用いて入念に飾り付けを施され、一連の服喪儀礼のクライマックスであるアーシューラーの日やその前日のタースーアーの日に、黒づくめのむくつけき男たちの肩に担がれ、賑々しく通りを練り回され、あるいはホセイニーエの広場で“のの字廻し”にされる。ナフルの異形さ、その巨体を取り囲む人・人・人のうねりから湧き立つ濃密な空気は、見る者を圧倒せずにはいられない――

今回「あいねイラン」シリーズ2作目として拙訳を上梓したアリー・ボルークバーシー著『ナフル巡行』は、上記のナフルをはじめとした殉教者のひつぎを模した物を奉じて練り歩く儀礼について、その来歴や謂われ、地域ごとのヴァリエーション、類似の服喪儀礼のイラン以外の国での例などを、百科事典的に網羅して紹介するものである。本書の特徴として、殉教者の象徴的ひつぎの巡行という中心的主題の理解の助けになるよう、関連の儀礼や祭具など周辺的な事項についても巻末の「補足」という形で相当の紙幅を割いて解説が付され

ている、という点がある。翻訳をするに当たっては、日本人読者がイランやイスラームについてあまり馴染みがないことを想定して、さらに細かい訳注を付し、原著にはない図版も相当数加えた。そのため、編集者泣かせの複層的な構成になってしまった嫌いはあるが、我々のような外国人があのかの得体の知れないドロツと濃厚な世界に思い切って一歩踏み込んでみる際の足がかりとなれば幸いである。

なお、本書の上梓後に知ったことであるが、ナフルについて日本語で読めるものとして、『動く山 アジアの山車：この世とあの世を結ぶもの…』（齊木崇人監修、杉浦康平企画・構成、左右社、2012年）という本の中に、モジュガン・ジャハンアラ氏の「イラン殉教者を称える生命樹の山車」と題した文章が掲載されているので、ここに記しておく（同書では、「ナクル」と表記している）。

最後にもう少し、ナフル巡行儀礼について時事的なトピックを絡めて紹介しておこう。本稿を書いている2021年11月現在、新型コロナウイルスの脅威がいまだ世界を席卷しつつあるが、ナフル巡行という「三密回避」の真逆を行く儀礼の現状はどうであろうか。直近のアーシューラーつまりイスラーム太陰暦のモハッラム月10日、エマーム・ホセインの命日は、西暦2021年8月19日であった。当時イランは、感染第5派のピークを迎えていた（アーシューラーの2日前の8月17日時点のイラン政府公式発表による新規感染者数は、過去最多の50228名。下のグラフの矢印部分を参照）。モハッラム月2日目に当たる8月11日、イラン・イスラーム共和国の最高指導者アリー・ハーメネイーのビデオメッセージが国営テレビで放映され、海外からの輸入ワクチンの使用を前言を翻して容認する発言とともに、「我が国、我が国民はこれら〔モハッラム月の服喪集会という〕神の祝福ある集いを必要としている。だが、これを挙げるに際しては、〔感染対策の〕規定が厳格に守られねばならない。」として服喪儀礼を行うこと自体は認める意思の表明がなされた。BBCペルシア語放送など海外メディアは「最高指導者が輸入ワクチンを禁止したことが感染拡大に歯止めがかからない主要因」「こんな状態でモハッラム月の儀礼を禁止しないのはおかしい」といった論調であった。



実際の現場の反応はというと、上の写真で紹介したヤズド州タフト県タフト市の有名なナフル巡行について、インターネットでいくつか記事を見つけた。実はタフトの街のナフル

巡行主催団体には「前科」があったようだ。タフトのエマーム広場では、前年の2020年5月のエマーム・アリーの日にも、同年9月のアーシューラーの日にも、ソーシャルディスタンス等の感染対策の規定を守らない形でのナフル練り回しが挙行され、後者では関係者6名が、公衆の衛生を害するおそれのある行為でありイラン・イスラム共和国刑法688条に違反するとして刑事訴追を受けている（<https://www.irna.ir/news/83796650>、<https://www.iribnews.ir/fa/news/2809367> 及び <https://www.irna.ir/news/84023225>）。そして今年のモハッラムの服喪月の5日目に当たる2021年8月15日のISNAの記事（<https://www.isna.ir/news/99052719784>）は、タフト県知事の声明「今年のタフトではアーシューラーの午後のナフル巡行儀礼は執り行わず」を見出しに掲げ、県知事が主催団体の代表者を一堂に集め、モハッラム月の服喪儀礼は参加者全員がマスクを着用、場所は屋外のみ、2メートルのソーシャルディスタンスを守り、服喪隊列の練り歩きやナズリーと呼ばれる願解きのおふるまい・食事の供応は禁止との通達を発し、我がタフトのモハッラム服喪儀礼はイラン全土の模範たるべしとして、ナフル回しの断行を阻止すべく牽制を行ったことを報じた。さらには、ヤズド州イスラーム宣教局長の「今年は我が州ではナフル巡行は実施せず」との談話を載せ、集団儀礼は個々の街区・ホセイニーエだけで完結し近隣の街区・ホセイニーエを訪問し合って交誼を結ぶ儀礼は禁止、と報じた記事もあった（<https://www.yjc.news/fa/news/7859726>）。

そして今年のアーシューラーの儀礼の当日、以下にご覧の写真のとおり、タフトでは名物のナフルのお練りがたっぷりと「密」を構成して挙行されたようである。





CC BY 4.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>> Abolfazl Mohamadi (Fars 通信社のサイト, 2021 年)

飾り付けも含めて事前の入念な準備が必要なナフルのこと、当局に全く感知されずに当日になってゲリラ的に挙行することは考えにくく、おそらくは、当局も建前としては難色を示すものの本気で取締りをするつもりはないのであろう。参加者たちも、「被抑圧者」気分が醸成されて、抑圧への抵抗者たるエマーム・ホセインの苦しみをよりいっそう追体験し、例年よりむしろ気合いが入ったのかもしれない。

かくして今のコロナ禍にあっても「with コロナ」の新しい服喪儀礼の形を模索するという風でもなさそうなタフトのナフル巡行儀礼は、今後も熱く続けられるのであろう。ヤズド州では「スピリチュアル・ツアー」と銘打って海外からの観光客をターゲットに服喪儀礼を見物する観光ツアーも催行されている (<https://isfahaninfo.com/tickets-and-offers/free-tours-of-imam-hossein-ceremonies-and-spiritual-tourism-in-yazd/>)。「ヤズドはイランのホセイニーエなり(ヤズドでの服喪儀礼の横断幕に書かれた謳い文句)」。イランの当局にはもう少しコロナ感染対策を徹底してもらいたいところではあるが、落ち着いた頃にでも、ぜひ『ナフル巡行』の本を片手にヤズドを訪問し、直接この濃密な空気を体験していただければと思う。ディーブ・イランによろこそ。

小林歩

(『ナフル巡行』翻訳者)